

社会全体が「人権擁護」の道へ



■81■

障害者を支え70周年

室蘭市母恋北町の社会福祉法人室蘭言泉学園が運営する障害児入所施設「室蘭言泉学園」が開設70周年を迎えた。聴覚に障害がある子どもが利用する室蘭言泉寮から始まり、現在は障害者事業、児童養護事業と多岐にわたって手掛ける。今月は児童虐待防止推進月間。節目を迎えた思いとともに、障害児や幼い子どもが被害者となる虐待事件が全国で後を絶たない中、子どもを受け入れる施設側の考えを、菅野登一郎理事長に聞いた。

(奥野浩章)

開設70周年を迎えました。室蘭言泉学園の今と昔について教えてください。

「私が入職した昭和48年には2施設でしたが、今は12施設でさまざまな事業に取り組んでいます。苫小牧や伊達にも施設があり、仕事のエリアはここ数年で広がっています。スタッフが優秀なので、

仕事ぶりに助けられていますね。当初の職員数は十数人でしたが、今はパートを含め約240人。当時は給料は安く、社会福祉的な事業にもあまり目が向けられていなかった時代で、今はずいぶん変わりました。障害者の人権擁護へ向け、社会全体が良い方向に行っている気がします」

「障害のある子どもの発達支援、18歳以上の障害者の生活介護事業、一般就労へのステップとなる就労継続支援B型事業など、障害者事業サービス幅広く提供していますが、気を付けていることはありますか。利用者の立場で物事を考え、社会に貢献していくことです。私



室蘭言泉学園理事長 菅野登一郎さん

すがの・といちろう 社会福祉法人室蘭言泉学園理事長。1973年(昭和48年)に室蘭言泉学園に入職。室蘭言泉学園、わかすき学園の施設長を経て、2016年(平成28年)に現職に就任。北海道有明高校卒。室蘭市出身。71歳。

取材後記

言葉の重みを感じる

「私が役に立つ事はないかと思っていた時、障害のある子どもと触れ合い、ボランティアでは物足りなくなり、この世界に飛び込んだ」。

造船会社をやめ室蘭言泉学園に入職した思いを赤裸々に話してくれた。やりたいと思った仕事に、途に取組み30年間、休日も子どもに関わりたくて学園に足を運んだという。「息子が小学生のころ『どこにも連れて行ってくれない』と言われた。女房にも苦勞をかけた」。それでも「相手の心を開くのは、付き合った事実と時間の積み重ね。信頼関係をつくるには時間が必要だった」という言葉の重みをひしひしと感じた。

たちの仕事は利用者の人生の質を高めること。いろんなプログラムを作り、工賃を少しでも多く払えるように努力しています。あらゆる障害のある方や家族の相談支援、働ける場所を提供し、グループホームで生活の場を確保しています。障害のある子どもから大人まで地域でしっかりと支えていきたい」

「もう一方の主要事業である児童養護についても教えてください」

「今はわかすき学園と小規模施設を合わせて2、18歳の45人が生活しています。健やかに成長しているよう、生活全般、あらゆる観点から支援しています。一人一人の入所理由は虐待であったり、経済的な理由などですが、親に代わる場所として育つていくような支援していくことが大切です。そのために年度計画を立てて運営しています」

「最近の児童虐待について、どのようなことを考えていますか」

「児童虐待や障害者差別はあってはならないこと。事件が報道されるたびに腹立たしく思ったり、私たちが事業を運営していく上で絶対にあつてはならない。今の子どもたちの遊びはゲームが主流で、

昔はなかったもので、一緒にサッカーや野球に熱中していました。情報が多くなり入るもので、惑わされないよう、職員との信頼関係を強化し、成長していくってほしいです」

「差別や虐待を無くすためにはどうすれば良いのでしょうか。」「難しい問題です。共生社会の実現のため、障害者に対するバリアフリーの整備、つまり差別や偏見、無理解が解消されるような考え方が広く社会に広がるのが基本になります。障害者については、来年の東京パラリンピックでも大きく取り上げられると思います。障害者への理解を深める大きな役割を果たしてくれると期待しています」

「来年1月26日午前10時から室蘭市民会館で70周年公開記念講演会を開催します。講師は元内閣府制度改革担当室長の東俊裕さんです」

「数年前に札幌で東さんの話を聞く機会がありました。本人も障害(小児まひ)により足が不自由のある当事者として、障害者とともに生きていく必要性などを聞いて感銘を受けました。室蘭でもお話ししていただくことで、地域にプラスになると考えました。すべての人に聞いてもらいたいのです」